

サラマンカにおける漢籍調査の概要

井 上 泰 山

一 はじめに

平成17年4月から9月までの半年間、関西大学平成17年度前期在外研究員としてスペインとポルトガルの主要都市にある大学図書館や公共図書館、あるいは、聖堂や修道院内の図書室、古文書館などを訪れ、各機関が所蔵する中国関係の文献を調査する機会に恵まれた。本稿は、それらのうち、首都マドリッドの西北に位置するカスティージャ・イ・レオン州の州都サラマンカにおける調査の概要を報告するものである。この分野に関しては先行研究が少ないため事前に入手できる情報も乏しく、また、限られた時間内での調査であっただけに、当該地域にある全ての機関について全面的に調査し尽くすことはできず、一部の機関についての限定的な報告に止まっていることを最初に断っておきたい。また、本稿においては、仮に調査対象とした機関に中国関係の書物が全く所蔵されていなくても、当該機関の総合的状况、すなわち、規模や歴史、所蔵書籍の主たる分野と傾向、目録の整理状況、さらには応対にあたった職員の状態なども、可能な範囲で詳細に書き記しておくことにする。中国関連の書籍が所蔵されていなければ、本来の目的自体は達成されないわけで、その意味から言えば調査そのものも全く無駄足であった、という考え方もできようが、私見によれば、必ずしもそうではなく、中国関係書は皆無である、という事実を書き残すことによって、今後同じような目的をもって調査に訪れる人々の無用な労力を省くことができる、という意味において、それもまた貴重な情報の一つに成り得ると考えるからである。加えて、今回は、従来あまり調査されたことのない

い機関にも足を運び、所蔵書籍の目録を実際に点検する機会に恵まれたので、これまで知られていなかった特殊な機関の情報も幾分は開示できるものと思っている。内容の不備を承知の上で、茲に敢えて公開する所以である。

二 サラマンカの概要

サラマンカは、マドリッドの西北約200キロの地点に位置する大学都市であり、新旧大聖堂や教会など、数多くの宗教に関連する建築物が現存することで有名である。中世以来の長い伝統を受け継ぐサラマンカ大学のキャンパスは、市の中心に位置するマヨール広場の南部に、かなり広範囲にわたって展開しているが、私が調査のために訪れた旧図書館や旧大聖堂、文学部の図書館などは、いずれも最も賑やかなマヨール通りの近くにかたまっているため、便利さという点では申し分のない位置にあるといえる。ただ、西洋の歴史的建築物の多くがそうであるように、建物の外部から一見してその場所とわかるような表示は一切なく、初めて訪れる者にとっては、仮に地図を頼りに歩いても、なかなか目的地に到達しにくいという状況にあるのも事実である。

私が調査のため初めてサラマンカを訪れたのは、平成17年4月初旬の、まだ朝夕の冷え込みが厳しく、陽射しが恋しい時期であった。大学図書館への正式な紹介状も持たず、いきなり当地に足を踏み入れた私にとって、頼りになる情報源といえば日本で購入して携帯していた市販の簡単なガイドブック以外にはなかったが、中世以来、街全体が大学都市としての性格を帯びているサラマンカにおいて、大学図書館に所蔵されている書籍情報にたどり着くのはそれほど困難な作業ではなく、幾つかの紆余曲折はあったものの、短期間の滞在の割には必要な情報がある程度入手できたことは幸いであった。ただ、以下に詳しく述べるように、調査の過程で、漢籍の所蔵並びに整理状況そのものについては大いなる疑問が浮かび上がり、今後課題を残す結果となった。まずは、各々の機関における調査の具体的状況から報告することにしよう。

三 各機関における調査の概要

（一）サラマンカ大学総合図書館

私がサラマンカ到着後最初に調査に訪れたのは、大学の総合図書館であった。総合図書館はマヨール通りのほぼ中央、宗教学部の真向かいに位置し、通称「貝の家」として知られる一風変わった建物の中にある。地図を頼りに歩き回って見たものの、なかなか見つからず、仕方なく、表通りにある案内所に駆け込んで情報を求めたところ、なんとその建物の裏側が図書館への入り口になっていた。早速、中に入ってカウンターの司書らしき老婦人に来意を告げたものの、残念ながら英語が全く通じない。スペインではよくあることである。そこで、予め用意しておいた英語とスペイン語との対訳カードの必要条項を指し示しながら反応を待ったが、婦人はしげしげとカードを眺め渡した後、困惑した表情を浮かべ、近くにいた学生らしき女性に何やら話しかけている。どうやら全くとお上げらしい。反応が芳しくないと思った私は、直接閲覧する以外にないと判断し、それが可能かどうかを尋ねたところ、特にパスポートの提示を求められるでもなく、荷物をロッカーに預けただけで、ただちに入館することができた。日本の一部の図書館のように、紹介状などという厄介なものもなく、初めて訪れた外部の研究者に対して比較的オープンに対応してくれるところは、スペインの大学図書館の有り難いところである。

さて、早速中に入って見ると、総合図書館には特に書庫といったものはないらしく、全て開架式になっており、誰でも自由に書物を手に取って閲覧できるようになっている。全館五階建てのかなりのスペースに、分野別に書物が配架されているため、利用者にとってはまことに便利ではあるが、そうした方式になっていることを知った時点で、私は自分の必要としている書物がそこに無いことを予感した。というのも、配架されている書籍がいずれも洋装本であり、しかも全て新刊本に近いものであることがわかったからである。中国の古典文学に関する線装本が、洋装本に交じって自由に閲覧できる場所に置いてあるなどということは、どうしても考えにくいのである。後でわかったことだが、総

合図書館はいわば学部 of 学生のための一般書を中心に置いているところであり、そこに専門書を求めること自体、もともと無理があったのである。ただ、最初にそこを訪れたことは無駄ではなかった。というのも、文献学部の図書館には中国関連の書物があるかもしれない、という情報が、退室間際に総合図書館のカウンターで得られたからである。総合図書館内を一巡りした後、私はただちに文献学部の図書館に向かうことにした。

(二) サラマンカ大学文献学部図書館

文献学部のキャンパスは新旧大聖堂の北側に位置し、総合図書館から歩いてわずか5分程度のところにあるのだが、距離はわずかでも、初めて訪れる者にとっては、これがなかなかわかりづらい。スペイン語に不自由なせいもあるが、いったん文献学部のキャンパスにたどりついて、受付で指示された図書館を探すのが一苦勞であった。というのも、図書館は確かにキャンパス内にあるのだが、教室棟とは別個の独立した建物内にあり、いったん教室棟を出て少し歩かねばならず、その入り口も、外部から見るとまことにわかりにくい。よくあることだが、普段利用している人にとっては何でもないことが、初めて訪れる者にとっては高い壁として立ちはだかってしまう。

午後1時前後であったろうか、しばらく周囲を徘徊した結果、ようやく図書館の入り口にたどり着いた私は、早速、受付の女性にくだんの対訳カードを見せ、日本から漢籍の調査に来たことを伝えた。恐らく英語は通じないであろうと考えてのことである。案の定、係りの女性は英語を解さなかったが、スペイン語の対訳によって来意を理解したらしく、何か一言つぶやいた後、近くに設置してあるパソコンの画面を指さした。オンラインを使って自分で勝手に検索せよ、という指示であることは理解できたものの、私の場合、特定の書物を探すために来たわけではないので、ネットによる検索にはあまり適していない。適当に書名を打ち込んでみてもよいのだが、表記法の問題もあり、それほど有効なアクセスの仕方とは思えない。ネット検索にあまり習熟していないのはこちらの問題であるとしても、スペイン語で表示されている画面を指さして、た

だちに必要な検索作業を開始せよ、というのも誠に無理な話である。あまりにも愛想のない司書の対応に、私は少々戸惑ってしまった。

そんなわけで、しばらく思案投げ首で立ちすくんでいたところ、思いがけず、たまたま閲覧に訪れていた台湾からの留学生が支援の手をさしのべてくれた。聞けば、台湾の輔仁大学の学生で、サラマンカ大学の大学院博士課程に留学してスペイン文学を研究しているという。ネット検索にも慣れているらしく、私の要求に応じて、いくつかの方法でアクセスしてくれた。しかし、結果はやはり思わしくなく、中国古典関係の書名を入力しても全くヒットしない。関連する本として画面上に現れたのは、わずかに Lin Yutang（林語堂）の文字だけであった。ネットによる検索には限界があると悟った私は、司書の女性に、書庫に入ることはできないかと尋ねてみたが、当然のことながら、特別な許可を取らない限り、いきなり書庫への入庫が許可されるはずはない。書庫にも入ることができず、ネット上からも容易に探せないとなると、もはや打つ手はない。留学生と司書に鄭重に礼を述べて、私はその場を立ち去った。

ところで、私のような目的を持って図書館を訪問する場合、まず確認すべきことは、漢籍もしくは東洋関係の書籍の有無を確かめ、仮に蔵書がある場合には、その目録が完備しているかどうかを確認することである。目録がある場合、それがネット上にのみあるのか、冊子として利用できるようになっているのか、そのあたりも予め問い合わせて見る必要がある。いずれにせよ、漢籍独自の目録が完備していさえすれば、その後の作業が順調に進むことを期待できる。

では、目録が完備していなければどうするか。その場合の最も有効な手段は、言うまでもなく、書庫に入り込んで、手当たり次第に直接書物を手に取って確かめることである。膨大な書物の中から漢籍を掘り出すのは容易ではなく、時間と労力を要することは覚悟しなければならないが、仮に条件が許すならば、それが最も確実な方法であるといえる。特に西洋の図書館の場合、漢籍（線装本）の保管に適した設備を有している所は限られていて、場合によっては、それらは厄介者扱いされて書架の片隅で埃にまみれ、雑然と積まれていたりすることもあるので、直接書庫に入って確かめる以外に手はないのである。しかも、

中国関係の学部を有する機関ならばともかく、そうでない一般の図書館などの場合、オンライン上に登録されていないことも多く、ネット検索の網にかからないこともある。しかし、だからといって必ずしも漢籍が皆無であるとは限らないのである。その意味で、何とか書庫に入りたいと要求してみたのであるが、いかに外部の研究者に対して開かれた図書館ではあっても、紹介状も持たずに直接飛び込んできた部外者にいきなり書庫内を自由に歩かせるほどオープンにはなっていない。それも当然の事である。そんなわけで、ひとまず退散し、改めて作戦を練ることにした次第である。

(三) サラマンカ大学旧図書館

数日後、私は大学の旧図書館を訪れた。15世紀末に建設され、以来数百年にわたって、4万点にもものぼる貴重な古版本や手抄本を蔵していることについては、市販のガイドブックで予備知識を得ていたものの、実際に足を踏み入れて見ると、想像以上に古色蒼然とした趣を有する書庫であり、整然と並べられた数多くの古版本の背表紙を眺めているだけで、中世の別世界に迷い込んだような錯覚に陥ってしまう。ただ、残念なことに、特別の許可がない限り書庫への入室は禁止されているとのことで、一般観光客用に設けられたガラス製のドアから、遠目に書庫の様子を窺い知るのみであった。

現在、図書館利用者用の閲覧室は同じ建物の2階部分に設けられており、書庫の書物を閲覧するには、まずそこへ行って、受付にパスポートを提示した上で、必要な事務手続きを済ませなければならない。言葉に不自由な私にとって、そうした基本的な手続きがまず第一の関門となる。実際、それさえ無事に済ませれば、その後の専門の調査に関しては何とかできるのである。関門突破に関しては、またしても現地に留学中の大学院生の力を借りることになった。サラマンカ大学の博士課程に留学して学位の取得をめざしている東京大学大学院生高田雄太氏に、たまたま付近の書店で出逢い、支払いにまごついている私に声をかけていただいたのが機縁となって、事情を詳しくお話した結果、多忙な時間を割いて入庫のための必要な手続きを完了していただいたばかりか、司書にあ

れこれと質問して、館内の蔵書の様子や、オンライン化された書籍の量など、各方面にわたる貴重な情報を引き出してくださった。その後の私の調査が順調に進んだのは、全くもって氏のお陰である。この場を借りて改めて謝意を申し述べたい。

さて、高田氏を介して知った司書からの情報によると、旧図書館の現時点での蔵書量はおよそ6万点から8万点とのことである。1千冊単位ならばまだしも、2万点もの誤差は何を意味するのか、些か疑問ではあったが、その場ではそれ以上の質問は差し控えた。蔵書の一部である法律関係のおよそ1万5千点に関しては既にオンラインへの登録が完了しており、パソコンで自由に検索することができる。しかし、残る6万点の書物については、現段階では受付の近くの目録カードで逐一検索するしか方法はない。ただ、手抄本に関しては1997年と2002年に、既に詳細な冊子目録が二分冊の形で完成しており、閲覧室の開架書架で自由に検索できるようになっているとのことであった。

以上のような基本的な情報を得た上で、早速調査を開始することにした。しかし、一体どこから手をつけたものか。書庫に入って逐一確かめることができればそれにこしたことはないが、既述の如く、特別の事情がない限り、どうやらそれは許可されないらしい。問題は、オンライン化されていないおよそ6万点の書籍の内訳であるが、何しろ所蔵書籍は膨大であり、持ち時間には限りがある。カード上で全ての文献を調査するにも相当の時間と労力を注ぎ込まなければならない。何とか工夫して効率的に調査を進めなければ、他の都市の状況を調べる時間がなくなってしまう。私は少々焦ったが、幸い、平日の開館時間が比較的長く、午前8時半から夜の9時まで利用できるため、全力を投入すれば、なんとか全容をつかめるに違いないと判断した。

あれこれ考えた結果、私はまず最初に手抄本の状況について調べることにした。手抄本は旧図書館の蔵書の中でも最も貴重な部類に属し、いわば旧図書館の誇る「顔」的な存在として世界中に知られている資料である。目録は、既述の如く、二分冊の冊子にまとめられており、閲覧室の開架書架に常時3部が配

架されているため、利用者には大変便利である。目録の正式な書名は、『CATÁLOGO DE MANUSCRITOS DE LA BIBLIOTECA UNIVERSITARIA DE SALAMANCA (サラマンカ大学図書館所蔵手抄本目録)』で、第一冊目に1679点、第二冊目に1098点、総計2777点の手抄本の詳細な書誌が記録されている。出版元はサラマンカ大学出版部であり、第一冊(846頁)は1997年に、また第二冊(1456頁)はその5年後の2002年に上梓され、整理に携わった7人の人々の氏名が掲載されているところを見ると、恐らく手抄本解読のための特別なプロジェクトチームが生まれ、およそ10年がかりで全ての手抄本を解読し、必要な書誌的情報を整理し公開したものと思われる。

旧図書館の手抄本が貴重である所以は、何と言ってもその抄記年代の古さにある。ちなみに第一冊目に収められた抄本のうち、幾つか古いものを列挙してみると、抄写年代のはっきりしているものだけでも、13世紀のもの(1254年)が1点、15世紀のものが5点、16世紀のものは19点、17世紀や18世紀のものに至っては150点近くもあり、まさしく古抄本の宝庫ともいべき垂涎の文献である。第二冊目にも相当古いものが収録されており、11世紀のもの(1059年)が1点、12世紀から14世紀までのものが各々1点づつある。こうした記述内容から判断すると、最初の段階でめぼしいものを整理して第一分冊に収め、その後の5年間で残りの文献を整理したものと思われる。

目録の記載内容をもう少し詳しく紹介しておくことにする。例えば [Ms. 95] の項目に記載された内容は以下のようなものである。

Latín, s. XV (1465), papel, IVh. + 256f. j215×145mm, caja ;
140×70mm., lineatirada, 18/30lin ; cuad, 15(12) + 16 + 5(12) ; letra
humanística cursiva de Alfonso de Palencia ; enc, piel sobre tabla,
hierro para cadena y restos de broches, corte, CONT. PE, ………

もう一つ例を挙げておこう。第一冊目に収録された抄本のうちでは抄記年代の最も古い1254年のもので、整理番号は [Ms. 294] である。

Árabe con caracteres hebreos, s. XIII(1254), papel, 1h. + 282f. ;
208×142mm., caja ; 140×90mm. ; cuad. de difícil determinación, quizá
alterados por la restauración ; letra rabinico — cursiva española ; enc, perg.
Foliación moderna, comenzando por la izda. IBN HASAN AL — ZUBAIDI :
Comentario al Kitab al — Ayn de AL — Jalil ibn Ahmad AL Farahidi Olim :
BUS 1—2—28 Bibl. FUENTE — URBINA, 27 ; LLAMAS, 278—279.

西洋の諸言語に暗い私には、残念ながら記述内容の全てを理解することは困難であるが、推測を交えて判断する限りでは、当該文献に関して、まず記載上用いられている言語が示され、続いて抄写年代、紙質、紙の大きさ、記載内容などが記されているものと思われる。

こうした記述内容を確認した上で、そこに中国のものが含まれているかどうかを、丹念に調査した結果、第一冊第二冊とも、漢字で表記されている抄本があるという記述は全く無かった。ある程度予測していたことではあったが、漢字で表記された古文獻の一部が西洋の手抄本に交じって長い間保管されているなどという状況は、サラマンカの旧図書館に関する限り、あまり期待できないことが判明した。

次に、目録カードの調査状況について記すことにする。旧図書館の蔵書目録カードは受付カウンターと同じフロアーにあり、常に司書の目の届く位置に置いてある。ただし、隣接する閲覧室にカードケースを運び込むことも許可されており、蔵書内容を全面的に検索するには便利である。閲覧室にはパソコンも数台置かれていて、常に数人の利用者が画面に向かって作業をしている。もちろん個人用のノートパソコンを持ち込むことも自由であり、その点では利用者の便宜が図られてはいるものの、静謐であるべき閲覧室にキーをたたく音が響き渡るのは、私としてはあまり有り難くない。個人的感想を述べるならば、パソコンで作業する部屋と閲覧室とは、やはり分離した方がよいように思われる。

それはさておき、私はまず、目録カードの全体像をおおまかにつかむことに

した。限られた時間の中で効率よく作業を進めるためには、予め仕事の総量を把握しておくことが肝要である。まず、目録カードの収納ケースであるが、これは日本の図書館などで通常使用されているものとほぼ同じで、木製のカードケースが縦に5段づつ並んでおり、それが横に連続する形態のものである。カードケースの数は全部で140箱。そのうちの5つは雑誌用に割り当てられているので、書物用のそれは135箱ということになる。その中に目録カードが、AからYまでアルファベット順に並べられている。ケースの中の箇々の目録カードは順番に並べて置いてあるだけで、日本の一部の図書館の目録カードのように、カードの下の部分に穴が開いていて鉄芯が通っているタイプとは異なっている。従って、カードの扱いには慎重を期す必要がある。一端誤って床に落としたりしてバラバラにしてしまうと、元来の順番がわからなくなり、修復にかなりの労力を費やすことになるからである。記載されている言語に通じない場合などは、なおさら神経を使う。このように、扱いに適度の緊張を伴う目録ではあるが、新たにカードを補充するには便利な一面もあるに違いない。

さて、目録カードに関する基本的なデータはおよそ以下の如くである。第一番目のカードケースには[A]の表示があり、そこに収められたカードの枚数を数えてみると、次のような具合であった。

A 105	ABE 102	ABI 123	ACAB 222	ACAI 170	ACI 49
ACTA 150	ACTE 46	ACU 24	ADA 126	ADI 117	AEB 141
AER 78					

これらを総計すると1453枚。つまり、一つの目録ケースにおよそ1500枚前後のカードが収納されている計算になる。これにカードケースの数135を掛けると、202500という膨大な数が出てくるのだが、箇々のケースをよく調べてみると、ケースによって収納カードの枚数に相当の差があり、中にはケースの半分程度しかカードが収まっていないものもある。その点も考慮に入れた上で、ケースのうちの半分が700枚程度のカードしか収納していないものとして再度カ

ードの総数をはじき出してみると、その数は全部で14万余り、つまり、単純にカードの枚数だけを問題にすれば、旧図書館はおよそ14万冊の書籍を所蔵していることになる。既述の司書の談によれば、蔵書はおよそ6万から8万とのことであったが、私の計算によれば、それよりも多くの蔵書があることになる。

それにしても、サラマンカ大学の旧図書館には一体どのくらいの数の書籍があるのか。正確なところは是非知りたいと思うのだが、不思議なことに、図書館の真下にある1階の大学公認ショップで購入した『大学案内』の類を見ても、常に強調されるのは誇るべき「マニユスクリプト」すなわち「手抄文献」の数だけであって、蔵書に関しては正確な数は公表されていない。私の得た感触では、書物の番人たるべき司書でさえ、万単位の誤差のある概数をもって答えるくらいであるから、正確な蔵書数は誰も知らないのではないかという気がする。歴史と伝統のあるサラマンカ大学の旧図書館に限ってそのようなことがあるはずはない、と考える向きもあるかもしれないが、実は、その後調査を進めるにつれて、この推測が全く的はずれなものでないことが、次第に明らかになったのである。

目録カードの総数を大雑把につかんだ後、私は箇々のカードを一枚一枚丹念に点検する作業に入った。漢籍らしき書物が交じっているかどうかを確かめるためである。点検していくうちに、目録カードの性格が次第に判明するとともに、基本的な事柄について幾つかの疑問がわいてきた。

まず、カード自体の状態について言えば、固有のフォームで統一されているわけではなく、大きさも紙質も厚さも様々であり（もちろんカードケースに収納できる範囲の大きさではある）、中にはノートの一部を切り取ったようなカードも交じっている。罫線のあるものもあれば白紙のものもある。カードの色も、白、グレー、赤の三種類があり、また記載文字のインクの色も黒と青の二色があり、一定していない。手書きのものがあるかと思えば、タイプで打ったものもある。要するに、目録カードは統一したフォームを整えておらず、随時補充されて今日に至り、雑然とした状態のまま放置されている、といった感が

強い。以下にカード記載事項の実例を幾つか示しておこう。

- (a) 91419 A. C. La luz eléctrica por _____ V. LUZ
- (b) 54845 A. C. Miscelaneas Eruditay Curiosa. Número I° ,
Que contiens la Historia Gel Teatro Griego traducia del ciage del jouen
Anacharsis a la Grecia por D. _____ V. MISCELANEA
- (c) ACOSTA Cristobal Tratado de las Drogas y medicinas de las Indias
Orientales con sus plantas dibnjados Burgos. ____ Por Martin de
Victoria. 1578 12hoy. +448pags. +1hoy. —19cm. Perg.
- (d) 42339 / ADRICROMIUS, DE LPHUS, Christianus /
/ Theatrum Terrae Sanctae et Biblicarum Historiarum cum Tabulis
Geographicis aere expressis Auctore Christiano Adricamio Delpho /
/ Al fin : coloniae Agrippinae — lu Officina Birckmauniem Sumptibus
Arnoldi Mylii /1593
5hoy +266pág +11hoy —36cm — Fol. mll Perg.

(a)はケース [A] の最初一枚の既述内容である。(b)は [A] の二枚目のカードのそれであり、(c)と(d)は、それぞれ、[ACI] と [ADI] の項目から任意一枚を抜き出して記述したものである。これら4枚のカードはタイプで打った文字でなく、いずれも手書きによるものである。

こうした記載内容から判断されることとして、カードに記載すべき事項に関する統一した基準は無く、司書の判断によって、また記入された時期によって記載内容が異なり、いわば基準のないまま適当に当該書籍の情報が書き記されているらしいことがわかる。

記載内容に関しては、さらに幾つかの点で疑問に思われることがある。調査を開始した当初は、当該目録が著者名目録だとばかり思っていた。というのも、ザッと見た限りでは人名のアルファベット順にカードが配列されており、書名は下位記載事項として扱ってあるからである。ところが、点検するにつれて、

その点が次第に怪しくなってきた。中には著者名の書かれていないカードも存在し、その場合、どうやら書名のアルファベットを基準に配列してあるようなのだ。となると、この目録には著者名カードと書名カードが混在していることになる。著者でも書名でも検索できるの是一見便利なのにも見えるが、カードに基づいて蔵書の総量を把握するととなると、かなりやっかいなことになる。カードの枚数がそのまま蔵書の数に一致しなくなるからである。初めにカードの総数を点検した際、およそ14万枚という数字が出てきたのは、そういう理由によるものであることが、ここに至ってようやく判明した。これでは蔵書の総量を単純につかめるはずはない。司書の口から出た万単位の数字の幅も、恐らくは目録カードの整理状況をそのまま反映したものであろうと思われる。

調査を進めるにつれ、カードの記載内容に関する別の側面も明らかになってきた。よく見ると、一部のカードには、右下に「Facultad de Derecho」「Facultad de Letras」「Facultad de Ciencias」「Facultad de Medicina」「Biblioteca de Unamuno」などの文字が印字されている。それぞれ、法学部、文学部、理学部、薬学部、ウナムノ図書館を意味する言葉である。20世紀を代表する哲学者ウナムノの住居が博物館として一般公開され、その蔵書も博物館の中にあることについては先述の『大学案内』等で予備知識を得ていたが、その目録カードまでが旧図書館の目録に入り込んでいるとは意外であった。ということは、当該目録カードは、旧図書館に所蔵されているものだけでなく、他の様々な学部の蔵書なども交じっていることになる。既述の如く、字体も紙質も一定していないところから考えると、恐らく、各学部に新たな書物が入る度に、カードを随時追加していったものと思われる。大学全体の蔵書を一箇所ですべて把握できるとすれば、それはそれで大いに便利ではあるが、果たして各学部の書籍の全てが精確に逐一カードで追加されてきたのかどうか、疑問を感じざるを得ない。学部毎の蔵書の全てを点検してみないことには、旧図書館の目録がどの程度完備したものか、にわかに判断を下すことはできないが、カードの現状を見る限りでは、あまり厳密な作業は行われていないのではないかという気がする。それ

はともかく、他の学部や図書館所蔵の書籍まで交じっている以上、旧図書館自体の蔵書量をカードで判断することは益々難しくなってくる。

カードを点検するにつれて、さらに驚くべき事態に出くわした。既述の如く、基本的にはカード1枚に1冊の書名もしくは著者名が記載されているのだが、それはあくまで原則であって、中には1枚のカードに何冊もの書名が記載されたものもあり、反対に、連続する数枚のカードに1冊の書物の内容がメモ風に細かく記載されていたりする。そのような場合、カードの様態も他のものとはかなり異なっていて、もともとノートの一部であったものをカード状に切り離れた形跡がうかがえる。こうなると、もはやカードの枚数と蔵書の数とは何の関係もなくなってしまう。私としては、歴史的文献を数多く所蔵しているという旧図書館の蔵書数を知りたかったのだが、残念ながら、ここに至って、その希望は短期間の調査では到底叶えられないものであることを悟った。蔵書総数の不明な図書館。考えてみれば実に不思議な現象ではあるが、国が違えば常識も異なるのは当然のこと、そこがまさしくスペインらしいところ、ということになるのかもしれない。

以上を要するに、旧図書館の目録カードは、外見上は135ケースに整然と収められてはいるものの、その内実となると極めて不備な面を残しており、統一した基準によって整理されたものでないことが明らかになった。だとすれば、最も基本的な事柄であるべき原本との対照自体もどこまで厳密になされているか、大いに疑問になってくる。書庫への立ち入りが許可されない以上、利用者側としては目録カードによって蔵書の内容を判断する以外に手はないのだが、肝心の目録カード自体にも信が置けない状態であるとすれば、もはやそれ以上の調査は空しい作業となる。

そんなわけで、残念ながら、旧図書館においては、今回は中国の古典に関するめぼしい書籍には巡り会えなかったが、心残りの点は、旧図書館の書庫に漢籍が保存されているかどうかさえはっきりしない、ということである。目録カードに反映されないからといって、書庫に無いとは限らない。というのは、仮に漢籍が所蔵されているとしても、現状によって判断する限り、きちんとした

形で目録カードに反映されているとも思えないからである。古典関係の漢籍のうち、私が調査したいと思うのは、かつて中国本土で出版された影印本の存在の有無であるが、仮に存在したとしても、近世に中国で出版された古典籍の場合、書名や著者名のアルファベット表記が原本に記入されているはずもなく、そうなると思われ現状のようなカードには記載されにくいものと思われる。

以上のような状況が明らかになった時点で、私はサラマンカ大学旧図書館における漢籍調査をいったん打ち切ることにした。正直なところ、それ以上調査を進める意欲が薄れてしまったのである。近い将来、中国語に通じた司書がメンバーとして加わって、書庫内の蔵書と目録カードが改めて逐一对照される機会があれば、そこに眠っている漢籍もようやく目を覚ますであろうが、書庫に立ち入ることのできない現段階では、遺憾ながら、スペイン流に長いシエスタ（昼寝）を与えておく以外に手はないのである。

（四）旧大聖堂資料室

サンタ・マリア大聖堂、通称旧大聖堂は、サラマンカの誇る由緒ある宗教建築物のひとつで、13世紀末におよそ百年の歳月をかけて完成したロマネスク様式を代表する聖堂である。その中に聖堂専用の図書室があることについては、事前に何の知識も持ち合わせなかったが、一般観光客に交じって参観した際、受付で聞いて初めてその存在を知った。この図書室の蔵書調査に際しても、初日のみ高田雄太氏に同行していただき、必要な手続きを済ませることができたのは幸いであった。

図書室は聖堂内を通して脇の階段を上った、やや奥まった所にあり、入り口は頑丈な鉄のドアで遮られている。通常は立ち入り禁止になっているのだが、臆さずベルを鳴らすと、中年の男性がドアをわずかに開けて応対した。来意を告げると、中に招じ入れられ、事務室らしき部屋に案内されてしばらく待たされた。日本の大学で中国文学を研究していること、今回訪問したのは専らスペイン各地に所蔵されている漢籍類を調査するためであること、書庫への入室までは望まないが、せめて目録カードがあればそれに基づいて調査したいと考え

ていること、などを、同行の高田氏に手短かに説明していただいたお陰で、翌日からの調査が認められることとなった。

日を改めて再度一人で訪問した私は、早速目録カードの点検に入った。閲覧室は実に狭く、小窓に向かって机が2台置いてあるにすぎない。その日の閲覧者は私の他には誰もいない。そこが、ある種特別の空間であることがひしひしと感じられる。すぐ傍では、司書がパソコンに向かって作業をしている。常に監視されている気がして落ち着かない。しかも、大学の旧図書館と異なり、こちらは勝手にカードケースを扱うことは許されない。1ケースごと司書が机まで運んで来るので、調査が終わると次のケースを要求する、といった具合である。窮屈この上ない雰囲気ではあったが、通常は許可されない場所での調査とあれば、多少の不便など問題にしている場合ではないので、与えられた条件の中で最大限成果をあげるべく、寸暇を惜しんで目録カードを逐一点検した。その結果わかったことは、旧図書館の場合と違って、聖堂の目録カードは全て統一したフォームを備え、文字も一律タイプで打っており、手書きのものは一枚もない。相当完備した目録であることが判明したものの、蔵書の内容となると、こちらの期待通りにはいかず、そのほとんどが18世紀以降のキリスト教の教義に関係する資料が中心であり、中国関係の書籍は1冊もなかった。ある程度予想されたことではあったが、聖堂の資料室だけあって、やはり宗教上の必要にかなう書物を中心に集めているものと思われる。書庫に入ることができれば又違った展開も予想されるが、現段階ではその要求は叶えられそうもなく、後ろ髪を引かれる思いを抱きつつ、鄭重に礼を述べて辞去した次第である。

四 まとめにかえて

以上、サラマンカにおける書籍調査の状況について、私が実際に体験した事柄を可能な限り詳細に報告した。言うまでもなく、今回サラマンカを訪問した第一の目的は、私が専門とするところの、中国の古典文学関係の文献、とりわけ、近世以降の白話文学関係書籍の所蔵状況を調査することであったが、既に明らかなように、幾つかの機関において調査を継続するうちに、膨大な古典や

サラマンカにおける漢籍調査の概要（井上）

貴重な抄本の存在自体は明らかになったものの、それらの中から東洋の書籍に関する詳しい情報を引き出すことはできず、今後に課題を残したまま調査をうち切る結果となってしまった。ただ、調査の過程で、サラマンカにおける東洋文化の位置づけ、もしくは漢籍情報の整理状況といった点について、そのおおまかな輪郭をつかむことができたことはせめてもの幸いであった。

本稿において取り上げた様々な検索上のハードルがクリアーされ、サラマンカに流れ着いた漢籍たちが長い眠りから目覚める日が早期に訪れることを願って、ひとまず本稿を終えることにする。

2005年10月20日 脱稿

2006年5月13日 補訂

（本稿は平成17年度関西大学在外研究（調査研究）による研究成果の一部である。）